

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 上田秋成と外来思想

doi:10.29714/TKJJ.199803.0002

淡江日本論叢, (7), 1998

作者/Author：蕭碧璽

頁數/Page：43-65

出版日期/Publication Date：1998/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199803.0002>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



上田秋成と外来思想

蕭 碧盞

論文要旨

上田秋成は俳友である勝部青魚から、中国小説の道を開かれ、儒者である都賀庭鐘からは、医術を学ぶ傍ら、儒学をも学び、庭鐘の創った中国白話小説の翻案にも興味を示した。加藤宇万伎からは上京した折に聴講し、多くは文通で、賀茂真淵の国学を研究し、漢学も雨月物語のために下地作りに励み、和歌の道は下冷泉家に歌学の添削を求めたりした。雨月物語もそうした学問の下地をもって書き出された。中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」「剪灯新話」「水滸伝」などの翻案小説に出典を得て、怪談や雅文調を交えた格調高い作品になっている。秋成の学とは、儒学・仏教の相乗の上に成り立った学問であるということができる。

「キーワード」：翻案小説 国学思想 外来思想 一向宗 母者人 白話小説

一、思想の推移

上田秋成思想は、常にその境遇の変化の過程に深く関わっている。それ故に学問の造詣の深さは、色々な方面に多彩且つ広範囲に及んでいる。

秋成は父の顔も知らず、四歳の時には生母にも捨てられたが、縁あって油・紙を商いとする養父に拾われ、幼児期は養父母の慈愛を一身に受けて過ごしたが、生来虚弱な体質で五歳の時にかかった痘瘡の後遺症で指が畸形となったが、すでに亡いはずの命を養父母必死の看護と加嶋明神の加護で取り止めたと言う思いは、今後の秋成の心に深く関わっていたと思われる。

病弱な体に加えて、異常な程に過敏な神経の持ち主であったため、秋成は自由で個性を伸ばす少年期を過ごしたようであるが、やや年を経ると遊蕩に耽り、あまり学問にも馴染まずに家を外に遊び暮らしていたと思われる。が、慈悲深い養父の強い勧めで、その温情に応えるため、なかなか書物に馴染まなかった彼も、時には机に向かって手習いなどを始めたりした。そのため手習いを始めたのはそう早くはなかったが、その反動か、手当たり次第に院本・浮世草子の類を読みあさって教養を身につけたと想像される。

当時は江戸文学中期の発展期にあって、俳諧・浮世草子を中心とする京阪文学は江戸に遷る過渡期であり、すべての文芸・文学に新陳代謝の新風が吹きこまれた頃であった。

二十歳頃より学問に専念する上に於いて、まず文芸として俳諧に遊び、次第に力を入れ、強い関心を示し始めた。上方俳壇の句集の「うたたね」「俳諧十六日」「皆面美」「おひきのめ」「はなしあいて」「裸嘶」等に入句してから次第に俳諧に傾倒していき、蕪村門下の高井几董に俳諧の指導を受けるようになる。後年（安永三年）四十一歳の時には、俳論「也哉鈔」を著わし、高名な与謝蕪村が長文の序を書き、その文才を讃えている。又俳友である勝部青魚から、中国小説の道を開かれ、煎茶も嗜むようになった。

二十六歳の頃には養父の強い勧めで、大阪の学問所懷徳堂に通い、そこで教授の五井蘭堂を師と仰ぎ、あまたの同僚と手習いから始まり、儒学その他の学問を学び、後の文人や学者との交遊もこの時に培ったと考えられる。向学に目覚めてからの勉学の態度は一途なものであり、進歩の早さは目覚ましいものであったと思われる。

airiti

二十七歳の時、生涯のよき伴侶となる植木たま女と結婚している。二十八歳の時には、今まで彼を慈しみ励ましてくれた養父上田茂助が死去したため、家業を引き継ぐこととなり、一家の中心となって働かねばならなくなった。しかしもともと商売には疎くて、商売熱心ではなく、俳諧・和歌・文学の道を好む心が芽生えていたので商いには馴染み難く、まだ昔の遊蕩の癖もすっかり収まらなかったと見られる。この頃から十年後の明和八年に火災に遭い、家屋と遺産のすべてを失ってしまうまでは、比較的生活も安定した時期であった。国学にも造詣深く関わっていたが、国学者の契沖の著書に触れ、賀茂真淵の国学思想の流れを汲む真淵門弟の加藤宇万伎や建部綾足に学び国学研究に本格的に取り組むようになる。その宇万伎を師と仰ぐようになった事情は異本膽大小心録の中に次のように書かれている。

……契沖の著書をかいあつめて物しりになろうと思ふたれど、とかくうたがひのつく事多くして、道はかいかなんだを、江戸の宇万伎といふ人の城番にお上りで、あやたりが引き合して弟子になりて、古学と云ふ事の道がひらける。はじめは、あや足が「教よ」といふについて学んだれど、とんと漢字のよめぬわろで、物とふたびに、口をもじもぐとして、其後いふには「幸い御城内へ宇万伎といふ人が来ている、是を師にして」といふたが縁じゃあった。

又「諸道聴耳世間猿」や「世間妾形氣」等を相継ぎ出版して、衰運に向かっている浮世草子時代の棹尾を飾った。浮世草子の執筆態度は八文字本屋の流れを汲むもので、いまだ流行をみ、自分が書くにはこれが適当と意識したのであろうか。作中人物の書き方も仏教界の頹廃墮落した一面を、その才気を十分に生かして殊更におかしく書き出そうとしたり、又それとは全く対照的に仏教信仰を肯定し、それを面白おかしく描き、これまでの勉学で培われた知的、心情的な関心の深さで書き進めていく。

明和八年の火災に遭うまでは、養母、妻の助けで、どうやら家業は続けられたものの、もう家業は再興することができないので、養母と妻を伴って定住する所もなく、所々転々と移り住んでいた。ようやく加島村なる所に移り住み、医業を学んとして、大阪天満の都賀庭鐘の塾に通い、四十歳にして医術を学び始めた。医学修行の傍ら、当面の生活や学問の費用のため、藤家時（古今序聞書の著者）らに古典の講読を行ってなにがしかの謝礼を受けていたと想像される。儒者である庭鐘からは医術を学ぶ傍ら、儒学をも学び、庭鐘の創めた中国白話小説の翻案や国学に興味を示し、衰微する大勢にあった浮世草子の在り方

に不満であったのか、現実より古典的なものへと傾いていった。

又、漢学をも儒者庭鐘に学び、庭鐘の作品「英草子」は読本の先祖とも云われている。

八文字屋本が廃れてきた後に代わって現れた小説が初期の読本である。読本と云うのは草双紙と違って、絵はわずかな挿絵で、あとはすべて文章で綴ったものである。

医師として開業してよりは、生来の真面目さで患者に接していたので、医業は繁栄して自宅も構えられるようになった。そして生活が安定してくると学問も和漢の道も活発に活躍し始め、加藤宇万伎からは、上京した折には聴講し、多くは文通で、賀茂真淵の国学を研究し、一方漢学もこれからの物語のための下地作りに励み、和歌の道は下冷泉家に歌学と作歌の添削を求めたりもした。

安永六年、秋成四十四歳の年に最も敬愛する篤学温厚な加藤宇万伎が京都で亡くなってからは、国学は他の師につかず、独学で研究することになるが、若い頃よりの自由奔放な学問の方向づけは大きく拡充され、庭鐘よりは儒学を吸収し、蕪村の俳諧の交わりもその一門の中で研鑽し続けていた。

宇万伎譲りの真淵国学を自己の経験を通して、清く、強く純粋に生きると云う人生観、運命観を持ち、学問、文芸の道は独創を尊び、才能のある人のみがなし得る修業等自己の理念に従って合理的に行動した。

雨月物語もそうした学問の下地をもって書き出されたのであろう。故に中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」「剪灯新話」「水滸伝」等の翻案小説に出典を得て、怪談や雅文調を交えた格調高い作品になっている。

安永六年大阪で開業し、医術を仕事とする事を心に誓い、学問・文芸の道は趣味として割り切った。その真面目さが認められて生活も安定し、生涯最も落ち着いた時期を迎えた。そして遊び心としていた学問・文芸の方面も、軽い読み物など、人から勧められれば書いていたので再び学問への興味をそそられた。

和文・俳諧・和歌の道はすでに世間にも高く評価されていたが、俳諧について論じた「也哉抄」を著わし、学問では安永年間の「伊勢物語」「長柄都考」「ささ波都考」に比べて遥かに整った「漢委奴国王金印考」「歌聖伝」などの考証も出している。和歌は「紅葉集」にも集録されている。

こうした多方面にわたる文芸作品の中で秋成の人生に対する考えや学問的立場も整ってきたものと思われる。

安永五年刊行の雨月物語はこうした中での出版であって、中国白話文学の影響を受けつ

つ、それを上回る傑作となっている。

天明六年より七年にかけての本居宣長との論争も有名である。その論争自体は、今の世では全く無効に等しい事ではあるが、宣長の皇国太古の淳朴を慕い、復古の必要性を強く説いて、儒学・仏教の二教(注①)はそれを汚すものとして排斥するのは、国家至上主義の偏見以外の何物でもない秋成は判断し、儒学・仏教が栄える事は歴史の自然の流れであると、痛烈な批判をしたのである。昔は昔の、現在は現在のそれぞれの良さを、どちらにも偏ることなく認める態度こそが望ましいとし、学問・思想いずれの面でも客観的・論理的に論じる秋成の所論は、終始宣長の主観的・独善的な学説を批判し、それから宣長との問答を断っている。

秋成は医師として一生懸命に勤めたので患者にも評判がよく、大変繁盛し、幸せな日々を送っていたが、生来病弱な体には無理が重なり病気がちとなり、その上患者であったたいけな幼い娘の病気を誤診して死に至らしめてしまった事で、良心の呵責により医師を廃業して穏当生活を送るようになる。そしてそれから気ままに学問に打ち込み、草庵を建てて「鶉屋」と名付けて数年住むようになる。

その後養母、姑母が一・二年の間に相継いで世を去った。妻のたまが剃髪して珊瑚尼と称したのはそれから間もなくの事であった。珊瑚尼の希望もあって、京都へ移り住んだが、その頃から少しずつ眼を患い視力を失っていった。四年後(寛政九年 一七五七)、三十八年連れ添った糟糠の妻珊瑚尼を急病で失ってからは悲嘆にくれる毎日を送った。

つらかりし此歳月のむくいして

いかにせよとか我を捨てけむ

世の中のさらぬ別れに惜しからぬ

老がいのちの末のすべなさ

この二首を柩の中に書き付けて手向けとした。

京都に移り住んでからは、前より生活は貧困となり、妻の死から孤独感も増していった。

歌人で晩年の秋成を助けた小沢芦庵との交わりは偏屈な彼の心も温かみを得たようであり、生活の支えにもなった。しかし、生活のために歌の弟子をとるように提言されても絶対に受け入れる事はなく、蔵書類を売ったり、沢山の揮毫をして人々に送ったりして生活の糧を得ていたようである。右目も悪くなり遂に両眼失明してしまったが、医師谷川良順の治療で先に病んだ左目は見えるようになり、両眼失明の難は免れたが、生活は依然として極貧であり、自分の老い先もさして長らえる事は出来ぬであろうと遺言状を書いたりも、

して、晩年唯一の友であった煎茶を飲んで老いの寂しさを紛らわした。(注②)

瑚璉尼の亡きあと、晩年の秋成を労り、何くれとない温情を施した小沢芦庵も世を去り、大方の知れる人は亡くなっていよいよこの世に於ける執着がなくなってからは、自分の心のおもむくままに多くの文学的決算とも思える書物を書き残している。そして芦庵の門人の一人であった羽倉信美邸の一室で文化六年（一八〇九年）六月二十七日に死去したのであるが、晩年は今までのこだわりもなくなって、江戸時代の中でも純度の高い、優れた文章・思想を残すようになった。

秋成の境遇や性格は決して恵まれた状態ではなかったが、若いうちの遊蕩三昧により色々な人々と広く付き合う機会があったので、心の蓄えも豊富であったろうと思われるのである。若い頃の秋成は学問の手始めに契沖の著書を読み、そして賀茂真淵の門弟である加藤宇万伎より真淵の国学思想を学んでからは、宇万伎の温厚な人となりを慕い、敬愛した。宇万伎との師弟関係は、宇万伎の亡くなるまで、およそ七年間位であったが、その間、宇万伎が京都に出仕している時は講義を受けたが、後は書簡のやりとりにより、古事記や日本書紀、万葉集、伊勢物語、土佐日記、源氏物語等の古代、中世、近世の古典作品及び歌学等の国語、国文学の学問を宇万伎を通じて、真淵の国学の真髄に触れてより、自分は国学思想の継承者であると自負していたと思われる。

ここでもう一度秋成の人となりを考えて見れば、決して順風満帆の人生ではなかった。

幼い時に実の両親に別れ、その身は病身で色々な病気を患い、そしてそのために神経的にも辛い思いをしてきたがために偏屈になり、潔癖な性格から世間を直情的に観察するようになり、それぞれ遊蕩に耽った青年期を過ごした身に、文芸の心が開き始めると、俳諧を始めとして、和歌に親しみ、当時の流行であった浮世草子をも執筆し、文才を自らおもむくままに発揮し、自分の見聞を材料にして、「世間猿」「妾形氣」のような人物の失敗を皮肉に描写したような遊び心を持って著作に専念した。

二、外来思想

大方の見方では秋成は国学者として位置付けられているが、国学思想とは「当時の徳川幕府の国家体制をより強くするために主張されたもので、国家権利を押し付ける政治思想がより強かったのではないかと思われ、現状の道德観を肯定し、人間の欲望や感情は元来、

自らの倫理的限度は持っている」と云う考え方をしていたのではないだろうか。

しかし自ら国学者であろうと思っていた秋成は、古事記・日本書紀に現れる日本の日の神、天照大神のまします国で、四海万国を照らし給う万国の元の国であると論ずる本居宣長と論争し、宣長の「そもそも皇国は四海万国を照し坐ます天照大神のあれませる本つ御国にして、その皇孫命の、天より降りまして、天地とともに遠長くしろしめす御国なれば、万国の元にして、万国にすぐれたるが故に、天地の始より神代のこと共、いと詳に正しく伝はり来て、今も古事記日本日本書紀にのこれり」(鉗狂人)

と論じているが、それに対して秋成は、胆大小心録の一〇〇～一〇一一条にわたって次のようにその反論を書いている。

天にさまざまあるはいかに。儒・仏・道、又我が国の古伝に云ふ所ことごとくたがえり。天とおおぎてのみもあらず。天祿・天資・天命・天稟など儒にはいふ也。仏の天帝もくだりて、我が法を聞くとなり。(中略)この国は、天が皇孫の御本國にて、日も月もここに生れたまふと云ひし也、是はよその国には承知すまじき事也。されば、よその国は君とあがめて崇敬すべきことありといふたれど、此ことわりなるべからず。(小心録 一〇〇)

月も日も、目・鼻・口もあって、人躰にときなしたるは古伝也。ソングラスと云ふ千里鏡で見たれば、日は炎々たり、月は沸く々たり、そんな物ではござらしやらぬ。い中人のふところおやじの説も、又田舎者の聞いては信ずべし。京の者が聞けば、王様の不面目なり。やまとだましいと云ふことをとかくにいふよ。どこの国でも其国のたましいが国の臭気也。おのれが像の上に書きしとぞ。

敷島のやまと心の道とへば

朝日に照らすやまざくら花

とはいかにいかに。おのが像の上には、尊大のおや玉也。そこで「しき島のやまと心のなんのかのうろんな事を又さくら花」とこたえた。「いまからか」と云ふて笑ひし也。(小心録 一〇一)

そして此の後の論争はさけている。これによって見れば、秋成は国学者としても、自由な自己の理念を自然の流れに従って合理的に行っていたと思われる。

秋成が生涯で最も敬愛し尊敬する加藤宇万伎と出会った事により、真淵の国学思想をよく理解した国学者としての通念で知られていることは前に述べたが、宇万伎の諸所の指導の中には古典、仮名文字などに関する学問のほか、和歌の実作についても指導を乞うたこ

とがあったが、宇万伎は直接の添削指導は行わず、真淵の「歌意考」等により、歌いの参考にした事がわかる。そして

志篤く道に深く立ち入らんとするも、後々の説の彼此ゆきあはぬに立ち迷はされつつ、そのことわりは熟くも味は、で、中々にあばめ憎むも多かりけり。既に京極黄門は「和歌無師、以旧歌為師」とも教え給へりき。こはもろこしの書に出たる語なれども、即採り用うるは其人の意なり。此事又歌のみにもあらじとぞ思ふ(注③)。

こうした学問全般にわたって示した宇万伎の姿勢が、その後の秋成の学問追求の姿勢に深い影響を与えることになる。こうした宇万伎の学問態度に新鮮な魅力を感じ、深い学問的感動と影響を受けたのは、宇万伎の篤学純粋な人間性による所に他ならなかった。

国学者としての純粋さ、清く、真直ぐな心を持った秋成の思想は、儒学に接する事で国学者としての本質が少し異なり、

儒学といへども、むかしありしは、ひたすら実体にてたのもかりしを、今はさる師は世にまれにて、詩文はなばなく作りもて手などみやびにかきすさび、酒おかしく酌みあそぶもとへは、人あまた集れり。(癩癖談 上)

「ひたすら実体にて、たのもかりし」、とは古典的朱子学者を指し、「詩文はなばなく作りもて」、とは荻生徂来派の云う国学思想である。

秋成の儒学とは、道徳としての儒学が本当の儒学であって、徂来等の国学思想は政治的理念の強い思想であり、秋成の国学思想は、仁・義・礼・智・信と云う人倫の道につながる朱子学を基盤としているのである。学問や著作、詩歌の道に優れるよりも、倫理的な生き方をしているかどうかと云う事にかかってき、人の性質をよきに導き、決して曲がった行いをする事なく、己れの道徳的頑固を守ることが強調しているので、本来の朱子学の四書の中の孔子の論語の云う君子論、人格論を中心にしたものであった。

そもそも日本の文化は、有史以来、大和時代よりこの方、外来文化の影響、刺戟を受けてきた。外国の文化を採り入れ、それを上手に咀嚼同化する事によって、古来の日本固有の文化的美点が発揮されているように思われる。文学も同様であって、江戸時代にかけては外来物、特に中国文化が歓迎された理由は、物語の筋書きの複雑さや趣向の面白さや、奇異な物語の作品などから江戸の文芸、趣味と合致した事が挙げられた。

ここで秋成の代表作を時代順にそこに流れる外的思想を探って見るに、中国文学、特に中国白話小説や剪灯新話、伽婢子の影響を受けていたことは明白であるが、しかし史実伝記等も交えて巧みな雅文小説として雨月物語等を著していた。その雨月物語に先立って、

明和三年（一七六六）に著した「諸道聴耳世間猿」と翌年の「世間妾形氣」の二つの浮世草子は、その頃の巷間の身近な人物を描き、宗教や信仰がもたらす人情や世話物おかしさや、おろかさを皮肉な筆致で描いたもので、和訳太郎とか和氏訳太郎の戯号で示すように、主要人物に仏教信者を登場させたり、親孝行な者が何一つ報われる事なく苦勞を重ねたり、熱心な仏教信者が織り成す愚信的な有り様や或いは、臆面もなく女犯破戒の醜態を晒す僧侶の存在等を滑稽且つ、皮肉を交えて批判し、「妾形氣」では妾と主人との愛欲の裏表を描写している。

おもはくは、我が心より出で、人の口にかはりゆき、貂となり鼬となり……其の尾に喰いつく世間の噂を朝三暮四の筆まめに書き聚め」（後略）（世間猿の序）

又「妾形氣」の序では、

当世でかけものの厚薄の情、をかききあり、はかなきあり、偶々なくさむ一節は、さても八文字が糟粕、これを除き、是を棄てて」（後略）

と示しているように、それらの生活態度を通して仏教と一癖も二癖もある人物とのかかわり方を批判したり肯定したりしている。

ここで秋成の作品の思想の推移を初期・中期・晩年と分けて考察してみる。

（イ）初期

初期の作品としては、浮世草子をあげることが出来る。浮世草子は通俗仏教を信仰する在り方を批判したり、僧侶のくだらなさを強調したり、僧侶の仏教に対する愚信の様を皮肉に軽妙な書き方で描きながら、又登場人物の日常的な事柄を通して純粋な仏教信仰を賛美もしている。こうした初期の作品に現れた仏教に対する考え方は、当時の秋成が根底に抱いていた仏教の本質が、生死にかかわる大事を、俗悪低劣な欲望の空しさを教え、あるべき僧侶としての道を悟り、人間は純粋であり、誠実をもって清らかに生きねばならぬと云うことを示唆するために、庶民の生活に密着した仏教を通じて、世に問うたものである。「世間猿」の一つの物語を見るに、一向宗信者の一家が織り成す信心の様子を辿っていくに、一向宗の強い信者である父親とその息子を、兄は芝居好きで、弟は僧にも勝るほどの信仰心篤き信者を配し、兄は母者人の日だけ精進すればよいと、彼なりの理屈をいい、弟は祖師上人は越後へ配流されてより三十余年の経過を延べ、北国での苦勞は、みな御自

身のためではない。獨世の凡夫を助けんとの修業なれば、せめて、後は旧跡順拝にと旅に出る。途中山賊に襲われ、このことが原因で死んでしまう。父はがっかりするが、「これも浄土にお救いいただいて仕合者です」と喜びの涙で話を締めくくる。その後、嫁やら、姪娘、孫が死に、猫までも溺死した。それに加えて長男までも芝居の最中に命を落としてしまう。そこで父親は、

朝には江戸塗りの紅顔も、夕には白骨の身となれりと御文様思出されて、いかな父親も腰抜けて、お救いもほどがある。これはあまりな片づけよう。此の上は吾らひとりのお救いなれど、もそつと装婆に用事があれば、まあ十年ばかり待つて給はれ。と一向一心にぞたのまれぬ。

と今までは何事も攝取不捨の御盟に報恩謝徳の信心ぶりを示していた父親が、自身の事になると、もう十年ばかり待つてくれと一向一心にたのむことの滑稽さ、皮肉さを秋成の感覚をもって鋭くあばきたてている。

(ロ) 中期

「諸道聴耳世間猿」と「世間妾形氣」を出版した翌年に出版された「雨月物語」は、形式内容共に、全然異なった様式で構成された読本である。

浮世草子が主題としている儒学・仏教の人物像は、信仰にしても、人生観にしても、世間に対して、皮肉、空言として観察したものものの構成であるが、「雨月物語」では、浮世草子では見られなかった中国白話小説の影響を多分に加味し、又人間描写も一段と進歩しており、かげり、深みのある人物像を描き出し、この世の人と彼岸に行った人との心の交流の中に、物語を展開している。怪奇小説として全編を構成し、その中に、儒学的・仏教的要素を取り入れ、観念的・倫理的な筋書きを表している。

中国の白話小説、特に中国の怪異小説を秋成独自の怪異的寓意で翻案し、それに加えて儒教の本質を人の心を善に至らす道であるとして、真淵の「国意考」寄りの考え方を示し、それを骨子としたものとを交えて九編からなる短編小説集を刊行したのである。

白峯

山家集

撰集抄（日本古典）

菊花の約

范巨卿鶏黍死生交

浅茅が宿

剪燈新話（愛郷傳）

夢応の鯉魚	古今説海（魚服記）
仏法僧	剪燈新話（龍堂靈会録）
吉備津の釜	牡丹燈記
蛇性の淫	警世通話（白娘子永鎮雷峰燈）
	西湖佳話（雷峰怪蹟）

これらの関係が影響し合って秋成独特の怪異小説並びに徳義的な人間探究を描いている。

儒教・仏教が日本に入ってきてから、人々の欲望が日本古来の質朴な思想を乱し、政治的な動乱の原因となった事を非難しており、その思想の犠牲者の一人に崇徳院をあげている。和学に造詣深い雅文調の文体で怨念の権化として綴られているが、それと相まって大部分は中国の怪異小説を秋成の独自の怪異趣味により翻訳又は翻案したものである。

各編を考察してみると、

第一話の「白峯」は、西行法師が白峯にある崇徳上皇の御陵に参詣し、野茨や蔓に埋もれて土を高く積み上げた上に石を三重に重ねただけのものが見えた。「これなん御墓にや」と心が暗く落ち入り、衝撃を受けた。夜を通して前世の罪に苦しむ上皇の霊をお救いしようとお経を唱えていると、上皇が大魔王となって現われ、その昔、上皇が遭遇され、篡位殺逆されたいわゆる孟子の革命思想を持ち出し、西行の仏教の因果逃避説を批判し、激しい論争を繰り広げる。西行は

よしや君昔の玉の床とても

かからんのちは何かかはせん

と詠み、「利利も須陀もかはらぬものを」と吟じて、仏心に立ち返る事を願った。

それで新院の御心も安らかになられ、御姿も怪鳥と共にかき消す如くに彼岸へ去られた。そのような事があってから白峯のお墓も美しく作り上げられ、恐るべき神霊をお祭りしたと云う。この頃の秋成の思想は、外来の儒教・仏教の示す思想の朱子学や禅宗の教と深く関わっており、それを国学者としての立場より、怪異小説の中に悲劇的な世界を巧みに取り入れ、こうしてはならぬ、こうでなければならないと思う秋成自身の感情を市井の中にあって、傍観者の立場から描き出している。

もう一つ、雨月物語には随所に空中浮遊、水中遊泳のような場面の描写がある。当時の人間にとって空中を飛翔することは、精神的にも肉体的にも快楽であり、解放感があって、多くの人々の関心事でもあったと思われる。

その頃渡来した蘭学は、国際主義の学問として目新しく、近世中期の閉鎖的状况にあっ

て当時の人々は海外に出て見知らぬ国へ行ってみたい、遠くへ行ってみたいと思う願望が、この飛翔によって見知らぬ海外の世界への関心に繋がっていったと思われる。本居宣長でさえも蘭学への関心を示して、遠くの国へ行ってみたいという衝動と共に、この世界が球体であるということを認識しているのである。

第二話の「菊花の約」ではその底辺にあるものは儒教の精神の信義を重んじると云う事であり、怪異的な描写と飛翔がそこに伴って、いかに人間の信義が大切なものであるかを描写している。この物語の原典とした中国白話小説の冒頭の詞を借りて、信義なきは軽薄なことだと断定している。

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐めや。軽薄の人は交りやすくして亦速なり。

楊柳いくたび春に染れども、軽薄の人は絶て訪ふ日なし。

旅先で病を得た、学識あり、純粋な心を持つ武士赤穴宗右衛門が、悪い流行病で我が身に移る危険をも顧みずに、親身になって世話をし、薬や食事にも気を使って、ようやく病を癒してくれた、清貧で学問一筋の若い儒学者丈部左門と学問について話をするようになり、終には義兄弟の契りを結ぶことになった。

左門飲びに堪ず、

「母なる者、常に我が孤独を憂ふ。信ある言を告げなばよはひも延なんに」と、伴ひて家に帰る、老母よろこび迎えて、

「我子不才にて、学ぶ所時にあはず青雲の便りを失なふ。ねがふは捨てずして伯氏たる教を施し給へ」赤穴拝していふ。

「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛をかふむり、賢弟の敬を納むる、何の望かこれに過ぐべき」と、よろこびうれしみつつ、又日来をとどまりける。

こうしている中に宗右衛門が自分の国の出雲へ様子を見に一旦下向し、又必ず帰ってきて親孝行をしたいので、一度帰る事をおゆるしく下さいと云って、再会を約して離別したが、自分の国の出雲では、城外へ出される事なく、ついに弟との約束を果たす事が出来ない。そして

かくまで漂客を恵み玉ふ。死すとも御心に報いたてまつらん。と云い、身にあまりたる御恩にこそ、吾半生の命もて必ず報ひたてまつらん

と云った武士の真情は、一時的な約束の言葉ではなく、「人一日に千里をゆくことあたわ

ず、魂よく一日に千里をゆく」と云う古の人の理を思い出し、自刃して、その約を守り抜き、又それを聞いた儒学者左門は、出雲に向って出発し、その真相を正すことにした。武士赤穴宗右衛門を城外へ解放せず、自刃に追いやった従弟に、「史記」に見える叔座鞅の故事を例に出し、いかにと問い正し、

伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を来しは信ある極なり。士は今、尼子に媚びて骨肉の人をくるしめ、此の横死をなさしむるは友とする信なし（中略）吾今信義を重んじ態々ここに来る。汝は又不義のために汚名をのこせ」

と云いも終わらず、抜き打ちに斬りつけ、一刀の下に倒した。そして宗右衛門に対する左門の信義はこうにして全うされた。これは、身命を顧みず信義を守り抜くと言う理念信仰から儒教の純粋な精神を読み取ることが出来る。

「浅茅が宿」の編では、直情を尽くす亡霊とでも云うか、これも「菊花の約」のように信義を重んじて死んでいった妻の悲しい物語として描かれている。

裕福な暮らしをしていた男が、物事に深くかかわり合いたくない性質を持ち、家業の農業に精を出さなくなり、次第に貧しくなって人から軽蔑視されるため、心機一転家を盛り返そうと、田畑を売り絹を仕入れ、遠く京へ商いをするために出掛けることを妻に告げた。

妻の宮木は美しい容姿で心ばえも立派な女性で、夫の行動を大変うたけきことに思い、言を尽して諫めても、夫は「常の心のはやりたるにせんかたな」と旅仕度をして云うにはかくてはたのみなき女の心の野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り。朝に夕にわすれ玉はで、速く帰り給へ。といふに「いかで浮木に乗つもしらぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此の秋なるべし。心強く待ちたまへ」

と云って急いで京へ出かけてしまった。それから世の中は戦が始まり、皆逃げ惑う中、宮木は夫との約束と云ってそこを動かず、元の家で暮らしていたが、夫は約束の秋になっても戻ってこなかった。

恨んだり、悲しんだり、と思いなやんで

身のうさは人しも告じあふ坂の

夕づけ鳥よ秋も暮れぬと

と詠んでは見たが、これを云い送るでだてではなく、彼女の心の中も、暮らしの進展も少しもないまま空しい日を送る事になり、そして七年の歳月は夢のように過ぎて、戦火のため、閉ざされていたとは云え、忘れ草の生い茂った野辺に埋もれて故郷を思い出さずに、その里の人々と親しく交わり、色々な事情があったとは云え、生来の素直な心からその里に居

着き、家に帰ることを忘れていたのは、直情を欠いた仕打ちと気が付き、妻の消息でも探し求め、せめてこの世になき時は、塚なども建てて、供養しようと五月雨の晴れ間を縫って、上方を旅立ち、故郷へと向かった。住み慣れた里であるから迷うことはないと思ったが、田畑は荒れ、人の住む気配はなく、茫然としていると、雲間の星あかりに我が家の門が見え、人の住む様子も見えたので、声を掛けると「誰」と咎めるので、

我こそ帰りまゐりたり。かわらで独自浅茅が原に住みつることの不思議さよ」と云ふを聞きしたればやがて戸を明くるに、いといった黒く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結たる髪も脊にかかりて、故の人とも思はれず、夫を見て物をも云はでさめざめと泣く。

そして妻が亡霊となって表れた姿に、その時はまだそれと気付かず、別れてからの事を繰り返し云い続けたが、妻は涙を押さえて、

一たび離れまいらせて後、たのむの秋より前に恐しき世の中となり、里人は皆家を捨てて海に漂ひ山に隠れば適々に残りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便りよしとや言を巧みていざなへども、玉と砕けても瓦の全きにはならはじものをと幾たびか辛苦を忍びぬる（中略）今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り、逢を待間に恋ひ死なんは人しらぬ恨なるべし」と、よよと泣くを「夜こそ短かきに」と言ひなぐさめてともに臥ぬ。

朝、起きてみると、そこは狐狸の住家と朽ち果ててしまっていた。幻として、妻の思いのたけの恨みを聞き、そこで始めて夫の心に妻の痛恨の思いが蘇り、墓前に身を投げて歎き悲しみ、念仏を唱えて夜を明かす。

さりともと思ふ心にはかられて

世にもけふまでいける命か

この辞世の歌は生きて会えなかった妻の夫への愛執の念と信義を物語っており、怪異小説でありながらしみじみとした情感を描き出し儒教の理念信仰がここにも窺える。

中期に於ける仏教観は雨月物語の中の他の編にも所々に見られるが、「青頭巾」で見ると篤学修行の立派な阿闍梨であったが、美しい童児を愛する余り、童子が病死すると、そのまま手元に置いていたが、終にはその肉、骨をまでも食し、なめつくして、果ては人里に下りて、人を死ぬほどおどかし、墓を暴いて生々しい屍を食い荒らす鬼と化した破戒僧が、高德の禅師の法力によりその心、求道、解脱の救済を受け、無の世界へ入っていったと云うものである。

airiti

さるにしても、かの僧の鬼になりつるこそ、過去の因縁にてぞあらめ。そも平生の行徳のかしこかりしは、仏につかふる事に志誠を尽せしなば、其の童児を養はざりしかば、あはれよき法師なるべきものを。一たび愛欲の迷路に入りて、無明の業火の熾なるより鬼と化したるも、ひとへに直くたくましき性のなす所なるぞかし『心放せば妖魔となり、収むる則は仏果を得る』とはこの法師がためしなりける。老納もしこの鬼を教化して本源の心にかへらしめなば、こよひの饗の報ひともなりなんかし

と、何か心に期する所があって、夕暮に山寺に登っていった。夜更けた月明の夜に山僧が慌ただしく禪師を求め、その前を幾度となく通り過ぎたが、禪師の姿が分からず、遂に倒れて起き上がれなくなった。翌朝法師に

「院主、何をか歎き給ふ。もし飢え給ふとならば、野僧が肉に腹をみたし給へ」

「師はよもすがらそこに居させたまふや」「ここにありてねぶる事なし」あるじの僧は、「我あさもしく人の肉を好めども、いまだ仏身の肉味をしらず。師はまことに仏なり。かく浅ましき悪業を頓にわするべき理を教へ給へ」「汝聞くとならば、ここに来れ」

とて、石の上にすわらせ、自分の被っていた紺染の頭巾を被せて証道歌二句を授けた。

江月照松風吹 永夜清宵何所為

「汝、ここを去らずして徐に此の句の意をもとむへし。意解けぬる則はおのずから本来の仏心に合ふなるは」と念頃に教へて山を下り給ふ。

こうして一年たった或る日、旅の途中で山寺に立ち寄った禪師は、法師を座らせた石の所へ行くと、僧とも分からないくらい、髭髪も乱れた影のような人がいて

蚊の鳴くばかりのほそき音して、まれまれ唱ふるを聞けば、江月照松風吹 永夜清宵何所為 禪師見玉ひて、やがて禅杖とりなほし「作麼生何所為ぞ」と、一喝して他が頭と撃給へば、忽ち氷の朝日にあふごとく消えうせて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとどまりける。

こうして、鬼と化した僧侶は、煩惱より脱却しようとして一応に仏心を求め続け、高僧の禅杖を受けた事により、悟りを開いた無の境地へ入っていった。現実ではあり得ない事であるが、その怪異描写を通して人間の心の不思議さを見事に描き出している。

雨月物語で扱われた仏教的物語各編を見ても、常に仏教の精神は肯定的であり、物語の主人公の執念や、その霊を慰め鎮めるのに、高僧を登場させて、直き心を尊び、邪淫の心

を鎮める人間像を仏教的人生観を通じて強く表現している。

(ハ) 後期

「雨月物語」では、物語の怪異性の中に悲劇的な世界を追求してきた。晩年の作である「春雨物語」に至っては、悲劇もさることながら、むしろ、悟りを開いて、自由な安らかな境地を見出し描き出されている。春雨物語の序文は和文で綴られ、雨月物語の漢文体との相違は、その時代の社会の違いに応じて言葉・文章の用い方も違っていることが分かる。

雨月物語は秋成四十三歳の時に刊行され、その約三十年後の作者七十五歳の時に世に出たのが春雨物語である。その間に、秋成の学者・文人としての自己の精神の成長があった。雨月物語刊行の頃の青年秋成は激しい感情の高まりとして研ぎ澄まされた鋭い信念の性格と姿勢を現わしており、春雨物語の和文調では、自由におおらかに自己のやさしい悟りの境地を表現している。

春雨物語の最終編「樊榷」の構想は中国小説の「水滸伝」の影響を受け、秋成独自の仏教観を物語の基調に創作されたものである。

伯耆の国の恐ろしい神が居ると云う大山の麓に住む、身体つきも大きく、腕力も強い無頼漢の大蔵が主人公で、博奕を打ったり、腕自慢したりするので、皆々は

「おのれは強き事いへど、お山に夜のぼり、しるしおきて帰れ。さらずば力ありとも心は憶したり」とてあまが中に恥かしむ。

「それ何事かは、今宵のぼりて、正しくしるしおきてかへらむ」

と、夜の山に登り、証拠の品として社前の重い賽銭箱を持ち帰ろうとして手を掛けると、手や足が揺らめき出て大蔵を軽々とつかみ揚げて空中を飛び、一夜のうちに遥かにある隠岐島の浜辺に打ち捨てられた。天狗の仕業と思われ、やっとの事で家に帰ってからも懲りずに博奕やそれをするために母親を騙して、家の金を持ち出し、それを取り返そうとする父親と兄を谷川に蹴落として殺し、大罪人となってしまう、ついに故郷を捨てて旅に出た。

旅の先々でも博奕を打って歩き、金をたくさん勝って得た時なども「しかじかの大罪人とらへよ」と触れが流れると「このあぶれ者等も大蔵なるべし」と目配せしたのを見て早速に逃げ出し、多くの金を捨て、百両だけ持って長崎へ逃げてきて、やもめ暮らしの所へ

入り込み、それでも暴力をきわめたので、横暴に耐え兼ね、愛想を尽かし、身を隠したのを、その逃げた先の廓に押し入り、散々あばれて

「我が女出だせよ」とてをどり狂ふ。

もろこし人のやどりて遊ぶ所へみだれ入りて、屏風も蹴たふして、唐人の前に、膝たかくかかげて、どうと座りたり。驚きおそれて「樊會排闥樊會排闥。ゆるしたまへ。我はただ何事もしらず」とてわぶる。

「もろこし人のつけし、樊會と云う名よし」とて今より後、名とせんとよろこぶ。捕吏の手を逃れて野山をさまよううちに疫病を患って路傍に倒れた所を村雲と云う盜賊に助けられた後

「御恩かたじけなし。いつにてもひくい申さん」「おのれはおもしろき男也。我が下についてかせげ」と云ふ。「博奕打つも盗みも罪は同じ」

と、それからは強盜殺人の罪をおかして、更に悪い道に落ちていく。たいそう怪力な大男で目立つので僧形に身を襲して旅をしていた。

加賀国山中と云う湯あみに宿をとる。「ことしの雪いと深し」とて雪あみ等かたあふ。山寺の僧の匏簫もて来て吹きて遊ぶ。樊會おもしろく聞きて「をしへ給はんや」と云ふ。僧喜びて、「よき友設けたり」とて喜春楽と云ふ曲を先づ教ふ。うまれつきで、拍子よく節に叶ひ、咽ふとければ。笙のね高し。

楽の音色に心動かした樊會は、「曲は一曲で心たりぬ」と、今までの鬼のような若者とは違って、後に改心して大和尚になる素地を表わして見せる。しかしこの後も盗みを重ねながら旅をし、江戸へ向かったが、捕まりそうになった手下を助け、二人を小脇に抱えて逃げる時、金を落として無一文になってしまった。道の脇で思案していると

僧一人来たる。目もおこさで過ぐるさまにくし。「法師よ、物あらばくはせよ。旅費あらばおきてゆけ。むなしくは通さじ」と云ふ。法師立ちどまりて、「ここに金一分あり。とらせん。くふ物はもたず」とて、はだか金を樊會が手にわたして、かへりみてもせず行く。

片時にはまだならじと思ふに、僧立ちかへりて「樊會おはすか。我發心のはじめよりいつはり云はざるに、ふと物をしくて、今一分のこしたる、心清からず。是をもあたふぞ」とて、取りあたふ。手にすゑしかば只心さむくなりて、かく直き法師あり。我親、兄をころし、多くの人を損ひ、盗して世にある事、あさましあさましと、しきりに思ひなして、法師にむかひ、「御徳に心あらたまり、今は御弟子となり、

行ひの道に入らん」と云ふ。法師感じて「いとよし。こよ」とて、つれ立ち行く。この物語は、みちのくに古寺の大和尚、八十よのよはひして、けふ終らんとて、湯あみし、衣あらため、椅子に坐し、目を閉じて、仏名をさへとなへず。侍者、客僧等すすみて申す。「いとたふとし。遺偈一章しめしたまへ」と申す。「遺偈と云ふは、皆いつり也。まことの事かたりて、命終らん。我ははうきの国にうまれて、しかじかの悪者なりし。ふと思ひ入りて、今日にいたる。釈迦、達磨も、我もひとつ心にて、曇りはなきぞ」とて死にたりとぞ。

「心をさむれば誰も仏心也、放ては妖魔」とは、此の焚會の事なりけり。と話を終えている。焚會を通して、真の仏道に目覚め、清らかな心となって無の境地に到達し往生させた秋成晩年の心は、悟りを開き、穏やかに、自由な心を示していると思われる。

三、晩年の心の推移

晩年の心の本音をなに憚ることなく書き綴った随筆「遠馳延五登」「金砂」「胆大小心録」などを通じて見たとき、秋成の晩年の思想立場は初期・中期より一貫した儒・仏の思想を肯定的に認めてはいるが、少しずつその形には、相違があるように見うけられる。

外来思想、つまり儒学・仏教に於いての秋成の思想は、そのおもむく所は、国学を研讀し、その昔百済の国より渡来した儒学が、日本の皇朝に何らかの影響を与えており、天智・天武帝のころの、皇帝継承上の争いを引き起こした壬申の乱は、応神天皇の時代に百済より貢がれた儒書より学んだ異国の禪位篡立の智略のせいであったと推測している。

儒教そのものは、本来人間の欲望を除き、善に導くことであるのに、その教えが実際には渡来国の禪位篡立の智略によって骨肉の争いを引き起こし、身を滅ぼすことになったり、吉備真備のように儒学の素養のあるために、かえってずるい考えをもって一身の栄達のみを望んだり、上代日本の歴史に及ぼした儒学受容の弊害は、奈良・平安朝にさかのぼり、質朴を忘れ、みやびな華美に流れた風潮も、秋成の儒学の根本理念である朱子学（君子論＝人格論）の精神をあやまって受け入れた事など歪んだり歴史を指摘し、批判している（注④）。

しかし秋成は儒学の根本理念に対してはあくまでも肯定的であり、常に学んで、天地自

然の理論を人それぞれ襟を正して行い、心をその道に還らしめればよしと心情的には認めている事が分かる。

儒者のこわくないやうに成った事は翁が生涯の中也。学問や詩文は下手でも、きつと聖人のけづり屑は見へた事じゃあった。(胆大小心録 五四)

大阪の学校とは潜在的な名目、郷校でも過ぎた事よ。饗舎といふがあたり前じゃ。開師三宅石庵は王陽明の風な学士じゃが、篤実でしんせつでよかった故、富豪の者がよって饗舎をたてて、すました事じゃ。(胆大小心録 二五)

段々世がかわって五井先生といふがよい儒者じゃあって、今の竹山、履軒は、このしたての禿じゃ。契沖をしんじて国学もやられた。竹山は山こかしと人がいふ。山はこけねど、こかしたがつた人じゃ。履軒は兄とちがふて、大器のやうにいふが、これもこしらへ物じゃ。(中略)学校のおとろへこの兄弟で徳がつきたかしらぬ。ごくもん所といふ わる口を前からいふた。なるほどろくな弟子は出来ぬに、皆かねづかいの、しんだいは つぶれつぶれて、若死。長生したら、獄門にあひさうな人があった。(胆大小心録 二六)

等に記されるように、秋成は自分の若かった頃は、まだ儒学らしい儒者がいたが、だんだん年をとってきたこの頃は、倫理性の乏しい俗化した儒者の様相を呈した者の多くなってきた事を批判し、儒者の表看板をかかげ、子弟の教育と称しておりながらその実は、本当の儒学の精神にもとり、「善」の実践を忘れた事実を批判している(注⑤)。

仏教が百済の国を経て、欽明帝の御代(五三八年頃)に渡来し、始めに「無量無辺の福德」「無上の菩提」を第一に宣伝したところ、欽明帝は聡明な方であり、その宣伝に酔える如く心酔し、物部氏等の排仏の忠言を斥け、更に蘇我稲目は仏教を崇めることを勧め、それ以来、仏教が盛んとなるに至った事などについて述べている。この事については、次のような記述がある。

欽明の御時、百済国の朝に媚びて、釈迦の銅像、經典、幡蓋等を奉りて、申す「此法諸法中におきて最も尊し。周公・孔子もしる事あたはず。福德心のままに菩提心を得るなり。よく修したまへ」と奏せしかば、帝王の足らはぬ事なき御心にも、是修せんとして、群臣に問ひしかば、皆おのが心に慾して、「よし」と答へたり。物部の大連尾與ひとりすすみ出で、「開国より天地地祇をまつりて、三十代の今にいたらせるにあらずや。蕃神を入れて地をかしたまはば、国津神のたたりません」と申す、忠直のこと嘉したたまひて「猶修せんとおもふ者に授けん」とのたまひし。蘇

我大臣稻目「我修せん」とて、こひとりて、向原の家を寺に改め、修業専らなりしかば、其徳によりて、三代の猛威、君をさへなきものに、馬子が崇峻を弑し奉りて、ためしなき女王を立て是を夾さみて朝政おのがまなり。厩戸太子とすすみ給へど、馬子に伏せられて、もとより仏道の欲情相かないしまに、万機を馬子の思ふにしたがひ、十七憲法といへども字紙となりしなり。馬子の君を弑せし罪を問はせ給はぬ太子も同罪ぞとて、儒者はにくむなり（中略）達磨、善導の「有を弃て、無を歸在せよ」と云ひしは、此始めてわたりしに、大にたがへり。（胆大小心録 一五八）

と記している。秋成は仏教伝来後の受容の実態がいかに上代日本人の心に好ましからざる影響を与えたかについて、例えば蘇我三代に及ぶ専横も、聖徳太子の弱腰の態度も、東大寺の大仏建立に伴う民の経済の疲弊や、道鏡の禪位篡立の野望も、すべて仏教の禍福思想の影響による悪例として批判している。

日本に渡来した仏教が掲げていた「無辺無量の福德、無上の菩提」の思想に対する秋成の仏教観の不審の言葉は注意すべきである。その著「遠馳延五登」「金砂」等によれば、仏法は大慈大悲の法であるから、その法を尊び、その教えを、よしとしながらも、それにより、政治の乱れや、専横の所業のあった僧侶などを非難し、奈良仏教に関与した弁浄、道慈、行基、行信、秦澄等の僧侶は、時の御所に招かれ、殿上に進み、官録を頂いても、仏道の修行は怠らなかつたと賞賛し、特に玄奘については、道鏡の所業を憎んで、伯耆の山中に入って修行しておられたのを、恒武帝の御病気の時に加持し奉れば、忽ちに平癒なされたので、又山陰に帰られた。平城帝の時に僧正位を授けられたが、返し奉りて後は備中の湯川寺に住まれ、めでたき山僧であられたと称賛している。自分の立場を越えて政治に介入し、自己の権利と保身に狂奔した玄方、道栄、道鏡等の所業を忌むしいと批判し、「有より無へ」帰りつく所の真実を追求した仏の大慈悲の法を、仏教の本来の姿として見なければならぬと主張している。そして

仏法のさかんなるは、此国にこゆる所なしとぞ。西竺におとろへ、中土にやや禪宗のみ寺院を建立すと。この国は、いにしへ華嚴、法相、真言。中世より善導の念仏、又達磨宗、日蓮宗。今にては門徒宗のさかんなる事、是に皆おさるるばかり也。いづれも盛衰ありて、此門徒と云ふ宗も、此頃はいささか衰ふべき端を見せたりき。されども其宗々のいたづら事なる事、国の為にもならず、ただ愚民の遊所とこそみゆれ。若き者の遊所にかひ初めてより、一夜も宿にあらじとするに同じく、老いたる男女は必ず宿に一日もあらじと立ち走りて、参りつかふ事。又さかんなるは狐の

つきたるが如し。是は釈尊の本意にあらざるべければ、必竟は遊所と思ふてゆるしおかるるなるべし。寂々たる寺院は、仏も安座ましますかと思ひて、門に入りては心すめる也。高座に上りて雄弁の僧と云ふも、坐を下れば、大かたは俗民にて、たのもしき人もなしとこそ思ゆれ。ただ今にては、僧も天下の業とゆるされて、万事は見ゆるしたまふべし。あまりに不如意の僧は、刑ありて槁頭に人に面をさらされ、又重きは島に流さるる也。しかれども不如法は改まるとも見へぬは、不如法の世界の仏法にて。淫奔ならずとも、利欲にふかくして、財をつまんとするはいかにぞや。一身の往生の後には、此財往が為ぞ。これただ利欲は婦人の情にて、つむをのみよろこばしきなるべし。人情につのりて世法にうとき愚人と云ふべし。新地に寺院たつかと思へば、又廟にて、或は宗門をかへるは、売利の丁人の宅居に同じ。庵住して、さる不浄に交らぬ僧もあれど、是も稀也。談義とて法をかたりて、諸国に奔走するもあり。皆いたづら事にして糊口のためのみとぞ思わるる。

(胆大小心録 七一)

と述べ、仏教各宗派のいたずらに栄える寺に群れ集まる男女の民は、若者が遊所通いをするのに似ており、狐つきになったようなものだと非難し、これは本来の釈尊の教えではないと説き、狂信者の集まらない静かなお寺の方が仏様も心安らかなことだと、そしてお参りに集まる人達の気もすっとするだろうと風刺している。生死の大事を教え、欲望の空しさ、盲信者の挫折した姿、俗悪・無節操な出家の在り方を皮肉り、仏教信仰の純粹・誠実に生きるための道しるべとなるべき純粹性を基準とした観察は、彼の潔癖な性格から窺い知ることが出来る。

四、結び

秋成は初期には、仏教を国学の「直き心」に比して、あだし心、遊び心としてとらえ、世の中を滑稽なまでに、当世の人情のおかしさ、はかなさを批判的にとらえ、時には否定的であったり、又時には肯定的であったり、とその仏教観、儒教観は流動的である。

しかし、国学の師として敬った加藤宇万伎の学問の姿勢を学んでからは、真淵の国学思想に傾倒していった。やがて国学からも超越し、秋成独自の学問思想を立て、やがて中国の白話文学の影響を受けて、怪異的なことや飛翔願望と、青年として純粹に儒教・仏教の

airiti

良い所、悪い所を批判したり肯定したりして人間としての心のおもむく所に合理性を見出していく。晩年に至ると、友人・知己の死に直面し、病魔と孤独にさいなまれつつ、儒学・仏教(注⑥)の教えを「罪は罪としていかに悔悟し、悟りを開く」と思想的に成就し、更に、多くの文学的達成を見るようになる。それが江戸時代の中であって、純度の高い文章・思想を残すことになるかように秋成の学とは、儒学・仏教の相乗りの上に成り立った学問であるということができる。

注

- ① 驚山樹心著『秋成文学の思想』「第二節 秋成の儒・仏二教観」による
- ② 胆大小心録 六九による
- ③ 秋成遺文による
- ④ 萱沼紀子著『秋成の世界』「第一章 秋成の思想は国学ではなく朱子学や禅によって特徴づけられていると結論する」による
- ⑤ 国文学（1995年7月）108ページ 近衛典子著「文献解題」による
- ⑥ 森山重雄著『上田秋成一史的情念の世界』「また秋成の儒教批判の根底には《易経》批判がある、という見解を示す。」による

参考文献

- 麻生磯次著『江戸文学と支那文学』三省堂 1936年
重友 毅著『上田秋成集』朝日新聞社 1947年
中村幸彦著『日本古典文学大系 上田秋成集』岩波書店 1953年
森田喜郎著『上田秋成』紀伊国屋新書 1970年
中村幸彦著『近世作家研究』三一書房 1971年
市毛勝雄著『雨月物語』有朋堂 1971年
日本文学研究資料叢書『秋成』有精堂 1972年
岩崎小弥太著『上田秋成』有精堂 1975年
萱沼紀子著『秋成文学の世界』笠間書房 1979年
驚山樹心著『秋成文学の思想』法蔵館 1979年
浅野三平著『雨月物語、癡癡談』新潮社 1979年
青木正次著『雨月物語』講談社 1981年
高田 衛・中村博保共著『日本の古典 雨月物語、春雨物語』小学館 1983年
浅野三平著『雨月物語の研究』桜楓社 1985年
森山重雄著『上田秋成一史的情念の世界』三一書房 1986年
野口武彦著『秋成幻戯』青土社 1989年
長島弘明・池澤夏樹『上田秋成』新潮古典文学アルバム 20 新潮社 1991年

雑誌

- 国文学 『上田秋成』 特集号 学燈社 1995年